


図書館だより 二〇十三年 四月増刊

ふるさとの風 卯月



歌舞伎
What is Kabuki ?

「知らざあ言って聞かせやしょう！」

～ 伊勢の歌舞伎 ～

伊勢市立伊勢図書館 ふるさと文庫

“清明”は二十四節気の一つ。清浄明潔の略である。

春分から15日目、新暦では4月5日ごろに当たる。

春の暖かな陽射しの中、まさに天地万物が清らかな明るさに輝く様を表す。

百花が咲き乱れ、桜前線が北上すると桜花爛漫…

華やかな春を迎える。



What is **歌舞伎** of Ise ?

「知らざあ言って聞かせやしょう！」

～ 伊勢の歌舞伎 ～

花、と言えば桜をさした時代が日本にあったことを古い歌集や物語は伝えている。

能や歌舞伎の中にも桜は数多く登場する。

江戸の文人は歌舞伎を「陽の器」と評していた。

江戸歌舞伎は本質的に明るく華やかなもので、観る人を明るく浮かれた気分にする演劇である。

そのための演出上の工夫に満開の桜が使われることもある。

植物や動物、天や地、季節、神仙…、それら森羅万象が無数の人々の知恵と工夫で巧みに仕掛けられ観る者を虚実の世界へと誘う。

歌舞伎が発展したのは江戸時代。伊勢は江戸、京都、大阪の三都に次ぎ歌舞伎興行の盛んな地であった。

中世の時代から伊勢三座と呼ばれる能楽が存在し、伝統芸能が浸透していた伊勢。

江戸時代になると「おかげ参り」に代表される大勢の参拝客が伊勢神宮を訪れ、内宮と外宮を結ぶ参宮街道にある古市は、参拝後の精進落としの場所として繁華を極めた。

最盛期の江戸時代後期には芝居や見世物などの興行物、遊郭、料理屋、旅宿などで賑わった全国有数の歓楽街であった。その様子は十返舎一九の「東海道中膝栗毛」にも登場する。

伊勢で歌舞伎、浄瑠璃などの芝居興行が行われるようになったのは江戸初期の寛永年間（1624～1644）、古市と中之地蔵町（現中之町）の間の山両町においてである。

当時は三ツ棟芝居と称し、一座は歌舞伎、二座は浄瑠璃芝居でいずれも露天小屋であったという。

その後古市芝居（口の芝居）と中之地蔵芝居（奥の芝居）の二座が一貫して歌舞伎興行を続け、三都以外の地方芝居で揺るぎない地位を築いていった。

特に上方歌舞伎との関わりは深く、伊勢は上方役者の登竜門、芸の試し所として一流の役者からも恐れられていたという。かつての七世市川團十郎や五世松本幸四郎、三世尾上菊五郎なども古市の舞台を踏んでいる。

伊勢で評判を上げそれを足掛かりに上方で実力を養い、江戸にもどって大成するという者も多く、江戸歌舞伎に占める伊勢歌舞伎の役割も尋常なものでなかったことが窺われる。

「新選古今役者大全 卷之一」（寛延三年（1743））の“田舎芝居の事”の項にも次の様に記されている。

田舎芝居の第一にたつは、伊勢の古市なり。

毎年正月末より五月までは二軒は在るとても、一軒もなき事はなし。

昔は伊勢の芝居を、藝のしめばとして、是を首尾よくつとめ、

評判よき役者を京大阪の二番め師にしたる事なり。

今は金次第で大立もの、われもわれもとゆく故、芝居も次第に高上に成て、上方に大概はおなじ。

むかしより上手名人とよばるゝ人の旅をかせぎいせをつとめ京大阪の二番め師に成、

それより名をあげたるはためし多し。

古市を舞台として「伊勢音頭」の名を冠した歌舞伎に「伊勢音頭恋寝刃」がある。

備前屋、杉本屋、油屋が三大楼として名を馳せた古市。

天明(1781~1789)の最盛期には妓楼は七十軒、遊女の数千人を誇り、五大遊郭の一つに数えられていた。こうした妓楼では顔見世として毎夜、遊女たちが唄い総踊りを見せる「伊勢音頭」があでやかに繰り広げられていた。

その古市の全盛期、寛政八年(1796)五月四日の夜事件は起きた。

油屋で医師孫福齋がなじみの遊女お紺をめぐって刃傷沙汰を起こした。世に知られる「油屋騒動」である。

この事件を大坂歌舞伎狂言の作者、近松徳三が事件後数日で脚色、

わずか二ヶ月後の七月二十五日大坂角の芝居(角座)で

「伊勢音頭恋寝刃」と題して上演され、一躍有名になった。

その後も各地での夏の出し物として定着し、

現在でも上演される事が多い演目である。

古市では事件後三十余年を得た文政十二年(1829)に、

四代目坂東彦三郎が貢となって上演し大好評を博し

今日に伝わる歌舞伎の名作となったのである。

油屋跡の隣、大林寺の境内にはお紺と齋の墓「比翼塚」があり、

今も花を手向ける人の姿が見られる。



大林寺 比翼塚

伊勢歌舞伎は近世後期まで口の芝居と奥の芝居が互いに競い合い盛り立て、さらに千両役者の来演が花街の繁栄と共にその時代を華やかに彩ってきた。同時にその文化が芝居通の人々を育みさらに“若い衆芝居”と呼ばれる地元の素人芝居への変貌をとげ、伊勢古市歌舞伎の先駆けとなったのである。

明治に入って間もなく奥の芝居が閉鎖されるにあたり、地元の人々の熱い要望により県下一の芝居小屋「長盛座」が建設された。明治二十二年(1889)のこけら落としは関西歌舞伎の雄、初代中村雁治郎を招いて盛況に行われた。長盛座の存在が地元の旦那衆による“明治の若い衆芝居”の結成を促す結果となり、勢いがそのまま“大正の若い衆芝居”に受け継がれていき、その人気は全国に響きわたり伊勢古市歌舞伎を確固たるものとしていった。

しかし昭和二年、大火により長盛座は全焼、永く輝かしい歴史に育まれた伝統の幕を下ろすことになり、隆盛を極めた古市歌舞伎もそれを機にその姿を消すことになったのである。

だが伝統文化を継承していこうという志の火は消えてはいなかった。

戦後結成された「伊勢古市歌舞伎保存会」は
何年か後に解散に追い込まれたにもかかわらず、
平成六年に再結成され今も活動を続けている。

“若い衆芝居”として親しまれてきた伊勢の華やかな大衆芸能
「伊勢古市歌舞伎」を後世に語り伝えていくために…。

現在古市には往時の面影を伝えるものはそう多くはない。
唯一「麻吉」は今も旅館として営業、その風情からは当時の栄華が偲ばれる。
遠く神々の山々が見渡せる大広間、
聚遠桜からはかつてそうであったように
芸妓たちが唄い踊る伊勢音頭が聞こえてきそうである。



口の芝居跡

満開の桜が華やかな春の訪れを告げる頃、久しく待ち望まれた歌舞伎座が再開場する。
歌舞伎界は江戸歌舞伎屈指の名優を相次いで亡くした。かけがえのない二本の柱はとてつもなく偉大であった。
あたかも芝居の神様が試練を与えたかのような衝撃の大きさは計り知れない。
しかし歌舞伎は日本人の心意気である。四百年の歴史の中、人々を魅了してきた豪華にして艶麗な舞台—。
先人の紡いで来た文化は時を超えて継承されていかなければならない。

職人たちの粋を集めた新たな殿堂、新歌舞伎座が幕を開けるのは四月二日。
この日は歌舞伎の歴史にも長く記憶されるだろう。
観客の脳裏には花道を闊歩する偉大な歌舞伎人の幻像が鮮やかに蘇える。
そしてさらなる新しい夢が花開くことを祈りつつ…。

春宵一刻値千金…

伊勢にも歌舞伎はあったのだ。

新歌舞伎座のこけら落とし。

團十郎家ゆかりの歌舞伎十八番「助六由縁江戸桜」を市川海老蔵が演ずる。

「十二世市川團十郎に捧ぐ」と題して…。

◇ 伊勢市史 第八巻 民俗編 (伊勢市／編 伊勢市 L243/1/8)

◇ 伊勢歌舞伎年代記 (吉田 暎二／編 放下房書屋 L774/1)

図書館だよりNo.134 増刊 平成 25(2013)年 4 月 1 日 発行